

特集：宮田俊雄先生への感謝をこめて

*Special feature: Happy Retirement of Professor Toshio MIYATA*

随想 (Essay)

## 宮田俊雄「音楽の道・教育の道」

### A journey through the musical and educational activities of Toshio MIYATA

宮田俊雄<sup>1</sup>・小杉裕子<sup>1</sup>・渡邊 康<sup>1</sup>

Toshio MIYATA<sup>1</sup>, Hiroko KOSUGI<sup>1</sup>, Koh WATANABE<sup>1</sup>

#### 音楽の道を志す

ピアノは小学校から和歌山で習い始めました。中学3年の時に自分の実力では将来音楽家になるのはとても無理だと思いやめる決意をしました。しかし、当時習っていた先生に桐朋学園高校音楽科の夏期講習に行ってみることを勧められました。そこでは、全国から集まった生徒や出会ったいろんな男連中に強烈な刺激を受け、こんな個性豊かな生徒がいる学校ならと音楽の道に進むことにしました。その一人は後にNHK交響楽団のコンサートマスターになった山口裕之ですが、アルカダッシュ・デュオ（トルコ語で友人）を組み、数年前に相山の音楽室でも一緒にコンサートを行いました。在学中、大学まで音楽のことでは常に刺激を受けていました。男子学生は1割くらいだったのですが、皆、音楽家として活躍しています。

#### 留学の思い出

ドイツ留学のきっかけは桐朋学園大学を卒業した後、3年間名古屋音楽学校で講師として小さな子どもを教えていた頃に、フライブルク音楽大学のアレクサンダー・ボーンケ教授（メンデルスゾーンのひ孫にあたる）が公開レッスンに来られたことです。レッスンを受け、自分もドイツに留学できるものかと相談してみました。その時に弾いた曲が、先生の好きなシューベルトやスクリアピンだったようで10月の学期からすぐに自分のクラスに来ればよいとなり渡航することになりました。

最初の2年間はボーンケ氏に師事、続いてソリスト試験コースの2年間は、ハンガリー人のティボー・ハザイ氏に師事しました。ハザイ氏は1950年のハンガリー動乱の際に、スイスに亡命。ある日「夜中にソ連軍の戦車のキャタピラの音が、遠く平原の彼方から聞こえてくる恐怖」と真に語ってくれたことは、今も忘れられない思い出です。

卒業後にピヒト・アクセフェルト氏に師事。バッハの全曲連続演奏会など驚異的なレパートリーを持ち、教育者としても非常に熱心な先生でした。3人とも音楽の理念、音色や技術的傾向が違いましたが、人間的な面でもとても影響を受けました。

大学での生活は翌日の練習室確保のため、毎朝7時に大学の門の前で待ち、開くと同時にグランドピアノのある部屋に走り、扉に自分の名前と時間を書き入れることに始まりしました。朝2時間、夜2時間しか書けないルールで、あとはアップライトピアノで練習をしていました。毎日そこに並ぶのは、ほとんどが日本人か韓国人学生でした。

卒業試験は2年間の学生滞在許可の間に受けることが義務づけられます。その間にソロリサイタル2回分とピアノコンチェルトを2曲準備しなくてはなりません。2回の一般公開演奏会をして、一ヶ月以内にその他のリサイタルとコンチェルトを大学内で抜粋して弾くことが課題でした。

卒業試験の選曲は自由選択、時代別に各様式のプログラムが入っていることが求められました。合格すると次のコース（大学院後期課程）に進むことができ、今度はその倍の量のプログラムを用意し、一般公開演奏会とレパートリー試験がありました。試験の準備のため、半期に数回の学内演奏会（各先生のクラス発表会）で曲を貯めては弾き、その時が今までで最も練習した時期でした。演奏会場はフライブルク市の旧市街の中心にある、カウフハウスザール（1520年）で行いました。すぐ隣にある大聖堂ミュンスターの鐘の音が、演奏中にも響いてくるような歴史のあるホールでした。

ピアノの授業では最初から暗譜でソナタ全楽章を弾くこと（授業は数人のクラスレッスン、一人2時間ずつ）が常識というところから、最初はとてもついていくことができませんでした。当時、ギリシャ人の留学生がそのくらいは私なら3日間で大丈夫よと言い、本当にできる人で驚きました。彼女は練習せずに楽譜を見ているだけで覚えてしまうのです。ピアノは指で弾くものでなく、頭とところで弾くものと

<sup>1</sup> 相山女学園大学教育学部

2024年2月5日受付

いうことでしょうか。

クラスレッスンには医学部の学生が音大の授業を同時に履修していたり、教職過程で音楽免許を取る学生も入っていました。彼らは先生と堂々と意見を交わし議論し、音楽的な面でとても自信を持っていたことが印象的でした。相山での「卒業生と教員によるコンサート」を始めたきっかけも、そんな経験から卒業生たちが仕事を持ちながら、自分なりの音楽活動に生きがいを持って続けていって欲しいと思ったからです。

### 音楽家と教育者を両立してきた想い

演奏活動は自分の勉強や研究のためだけでなく、その経験によって触発される発想や技能などにより授業に際しても多に役立つことだと思っています。留学の前は、音楽教室で子どもを教えていましたが、果たして子どもに何を教えるべきか、本当に自分は音楽のことがわかっているだろうか、もう一度勉強し直したいと思っていました。帰国後、1986年から2007年まで、相山女学園大学の全学部と短期大学で非常勤講師として「芸術」「音楽」の授業を担当させていただきました。初めての100人以上の講義授業で、一般の学生の中に音楽や芸術に対して共感や興味を強く持っている人が思いのほか多くいて、そのことに励まされ長い間、授業を担当できたと思っています。

### 宮田先生との対談——宮田先生に感謝を込めて (聞き手：小杉・渡邊)

**質問：**先生は教育学部立ち上げの最初の教員メンバーのおひとりです。その始まりでは音楽免許コースにはどのようなイメージをもっておられましたか。

**宮田：**上記のように、それまで相山では短大と大学全学部で「芸術」や「音楽」の授業を担当させてもらっておりましたが、音楽が専門でない学生にどうしたら音楽に興味を持ってもらえるか、ということを考えながら授業を進めてきました。100人以上のクラスの中には必ず非常に興味を持ってくれる学生がいて、それは幼少の頃から音楽に触れ親しみ、専門的に進まなくとも音楽経験の豊かな人がこの相山では多く存在するからだと思いました。ですから音楽コースのスタートに関して、そのような学生が多くいるということを確認していましたので、迷いや不安はありませんでした。

また、立ち上げの当初から音楽コースの中心となられた植松峻先生や諸先生方の指導のもと、自分も同じく教員として育ってきたような思いがあります。特に第1期、第2期生の頃、カリキュラムが一巡するまでのワクワクドキドキするような思い、そして4年生が揃った時に初めて、ああ大学での授業、生活はこういうものなのだなと実感した次第です。

そのころ数学の白井先生と「お互い拾ってもらった同士なのだから、頑張ろう」と言っていたのはいい思い出ですね。

**質問：**相山教育学部の音楽免許コースは音楽専門の教育と具体的にどのように異なっていましたか？ またその特質はどのようなものでしょうか。

**宮田：**入学試験に実技試験がなく、入ってから手を上げるシステムは数学コースと同じですが、今まで音楽免許コースは平均して十数名、多くて23人。個性豊かな音楽コースの学生たちがひとつになってまとまり共に進んできている。そして卒業してからもその関係が続くといったところが最も良い点だと思います。

音楽の専門で入学前まで進んできた方は、演奏技術を磨くことだけでそれ以外に関心がないといったことが多いのですが、教育学部の学生は高校生時代まで広い範囲の学習に取り組んでいるので様々な知識と見識を持っていると思います。それが卒業後のキャリアとして教員の道を選ぶという強さにもなっています。そして音楽に熱い情熱を持っていて、幅広い知識や感性がそこに加わり、卒業時には学生自身もそういったことに気が付き、自分の力をさらに伸ばしていると思います。

実際に7割を超える学生が教職に就き、そして卒業してからもそれぞれの仕事を続けながら、音楽免許コースのメンバーの輪を広げつつ、自主的な演奏活動も計画企画しています。それは生涯にわたって学び続けることにつながっているので、成果はとても大きいと思っています。

**質問：**最後にこれからのご活動について教えてください。

**宮田：**まずは来期から相山オープンカレッジで401音楽教室を借りて音楽講座を一般の皆さんに対して行う予定です。それは私にとっても大きな刺激になると楽しみにしています。演奏会はこのところリサイタルにはなかなか手が届かない状態だったので、数年計画で取り組んでいきたいと思っています。また室内楽は一番好きですので続けていきたいと思っています。